２０２６年4月２４日（金）

老球の細道９１９

青天の霹靂（へきれき）⑨

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

１月２８日(水)から２月９日（月）まで１３日間に渡るICUでのお勤めから解放されて、ようやく２月１０日（火）入院病棟８階南病棟に移動した。退院まであと少しとなり、家に帰宅するモチベーションがさらに高まった。

入院病棟での試練は、食事の回復である。今まで口からの食事はなく、栄養はすべて点滴で摂取していた。前日喉に造影剤を入れて喉の通過の様子を確認したところ、無事通過して異状なしの状態であった。しかし、リハビリの先生の指導による水の飲み込みによる「嚥下」訓練では、５CCくらいの水はスムーズに呑み込めたが、倍以上の水になると水が気管の方に入りひどくむせてしまった。今でも水分は注意しないとむせる。ビールが心配である。

１０日午前中、ICU 病棟の看護師さんたちに感謝しながらお別れの挨拶をした。２週間にもわたる長い期間、何から何まで大変お世話になった。暇なく動き回り、色々な患者に対して親切な対応、そして医師とのコミュニュケーションも対等にこなす豊富な医学知識など感嘆することばかりであった。

入院病棟に移動し、昼食でさっそく口からの食事がスタートした。最初は、重湯、味噌汁（とろみ)、ゼリー状の氷。夕食は、重湯、味噌汁（とろみ)、リンゴゼリー。いずれも喉にひっかかる感じがして十分に食べられなかった。次の日から徐々にご飯が３分粥、５分粥と硬さがグレードアップしていった。副食の方も柔らかいものから硬めのものにと。喉の飲み込みはあいかわらず違和感があったがなんとか完食した。食べないことには身体は元通りにならないと思い根性で食べた。

この頃になると、身体から色々な管や傷をふさいでいたホッチキスなどが取り外され、唯一残ったのが腸瘻（栄養や薬を腸に通す）だけとなった。７種類処方されていた薬は点滴から腸瘻へ、退院する頃には口からへと回復していった。また、術後の合併症として残ったのが、食事により喉のつかえ、声がかすれて出なくなる嗄声、せき、そして体重減少である。これらは退院後現在まで生活の質（QOL）を下げている（嗄声は最近回復中)。

入院期間中に、U-12 新人地区大会が開催されていた。最終日までは退院できると思っていたが、主治医から無理しないほうが良いと言われ断念した。それまで大会に向けて孫たちへのアドバイスを交換日記でやり取りしていた。ICU にいた時も入院病棟にいた時も妻が運んでくる孫たちのノートは生きる励みにもなっていた。最終日の閉会式で孫娘が所属する城北行仁女子、関係する坂下ミニ男子に賞状を手渡しすることができなくて残念だった。

「室井爺が歩けばバスケット関係者に当たる」。病院の看護師やリハビリ士にもたくさんの関係者がいた。ミニバスの保護者、高校時代の部活動選手、新潟、宮城県の私の知人の先生に指導を受けた選手、そしてなぜか宇都宮ブレックスのブースターなど盛りだくさん。バスケの話でICUは多いに盛り上がった。やはりバスケは世界一のスポーツである。〈続〉